

聖書:士師記16章17～22節

説教:苦しみの中にあっても

はじめに

これまでのあらすじを振り返ります。サムソンが千人のペリシテ人をろばのあご骨で倒し、イスラエルのさばきつかさになってから二十年が経ったときのことです。ペリシテ人の女性デリラを好きになり、毎晩のように通うようになる。これを知ったペリシテ人の領主はデリラを金で買収し、サムソンの弱みがどこにあるか聞き出すようにそそのかします。サムソンはデリラの甘い声に誘惑され、自分の秘密を教えてしまった。それが前回までのあらすじです。今日の箇所では、サムソンはペリシテ人の手に捕らえられ、ひどい目にあっています。世の人たちから言わせれば、力だけはあっても女性で身を滅ぼした愚かな男ということになるでしょう。しかしヘブル人への手紙によれば、彼は偉大な信仰者の一人に数えられているのです。それはどういうことなのか。ともに考えてまいります。

1 サムソン

1) 心のすべてを明かした

18節を読みます。「デリラは、サムソンが自分の心をすべて明かしたことが分かったので、こう言って、人を遣わし、ペリシテ人の領主たちを呼び寄せた。「今度こそ上って来てください。サムソンは心をすべて私に明かしました。」ペリシテ人の領主たちは、彼女のところに上って来たとき、その手に銀を持って来た。」

ここで、「サムソンが自分の心をすべて明かした」というところに目を留めています。ひとつ前の17節にも同じフレーズがあるので、三度同じ言葉が繰り返されています。なにか大切な意味がありそうです。そのことはまた後で触れることになります。

2) 髪の毛を剃り落とされる

サムソンは、ナジル人の誓いをする者として生まれ育てられてきたことを、デリラに打ち明けました。ナジル人の誓いをする者は、ぶどうで作った物を飲んではいけなし、髪を切ってもいけないと定められています。サムソンは平気でぶどう酒を飲んでいたようですが、自分の力の源が頭の髪の毛にあることを知っていたので、切らせたことがない。それだけは守ってきた。しかしデリラの膝の上ですやすやと眠っている間に大事な髪の毛を切

られてしまい、あっけないほど簡単にペリシテ人の手にかかってしまいます。

2 主

1) 離れる

なんとも残酷な話しが書かれていて、どこに神の恵みがあるのかと思ってしまう。それでも手がかりはあります。20節を読みます。「彼女が『サムソン、ペリシテ人があなたを襲って来ます』と言ったとき、彼は眠りから覚めて、『今度も前のように出て行って、からだをひとゆすりしてやろう』と言った。彼は、主が自分から離れられたことを知らなかった。」この所の「主が自分から離れられた」というところに注目します。これはどういうことか。ちょっと考えてみたい。

2) 罪人サムソンとともにおられる

二十年前、彼がろばのあご骨で千人のペリシテ人を倒すという大きなできごとがありました。戦いが終わって一息つくとき死にそうなほどの喉の渇きを覚えたとき、彼は生まれて初めて真剣に主に祈って助けを求めます。そのとき彼は、信仰者になりました。ではそのときから罪を悔い改めて、正しい生き方をするようになったか。いいえ、そうはならない。ガザの町の門柱を壊して持つて行くというような乱暴を働き、イスラエルの敵であるペリシテ人の女性のもとに通い続けて止められない。とても神から愛されるにふさわしい人とはとても思われない。しかし聖書は何と書いているか。

「主が自分から離れられたことを知らなかった。」つまり、罪から離れられないサムソンであったのに、主はずっとサムソンとおられたということになる。

3 イエス・キリスト

1) すべて知らせた

そこからどんなことが見えてくるのでしょうか。

先ほど、サムソンが自分の心をすべて明かしたということばが三度繰り返されている、ということを行いました。彼の最大の弱点を、金で買収されたデリラに教えてしまった。「心をすべて明かした。」ことばは美しいですが、その結果真つ暗闇の世界に突き落とされてしまいました。このこと

をイエス・キリストの視点で見たならどうなるでしょう。

ヨハネの福音書15章15節後半にこうあります。「わたしはあなたがたを友と呼びました。父から聞いたことをすべて、あなたがたには知らせたからです。」あなたがたとは、直接には弟子たちのことを指します。イエスは、弟子たちにすべてのことを知らせたというのです。サムソンが「心のすべてを明かした」というのと似ていませんか。こじつけだと言うのでしょうか。確かにここだけ切り取ったならこじつけです。

では、イエスが弟子たちになにを知らせたのか。その内容を見てみたらどうなるか。前後しますが、同じ所の13節を読みます。「人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」友とは直接には弟子たちを指し、また私たちを指します。その友のために主イエスがいのちを捨ててくださる。これが「すべて知らせた」の核心部分になります。

2) 友のためにいのちを捨てる

もう一度整理しましょう。サムソンはデリラに「自分の心をすべて明かしました。」その内容はこうでした。「もしも私の髪の毛が剃り落とされたら、私の力は私から去り、私は弱くなって普通の人のようになるだろう。」その結果、ここに書かれているとおりに、力を失い、ペリシテ人のに捕らえられ、何も見えなくなり、ペリシテ人の笑いものになるほどに弱くなってしまいます。しかしそこで終わりません。最後は、自分のいのちを投げ打って、柱を倒して建物を崩し大勢のペリシテ人を倒し、イスラエルを救うことになります。

イエス・キリストの場合はどうでしょう。「人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」このように、ご自分の友にすべてを知らせてくださった主は、金で買収されたユダの密告により、あっけないほど簡単に祭司長、律法学者たちの手に捕らえられ、弱くなられました。そうして、友である私たちのために自分のいのちを十字架でなげうって、私たちを救いに導いてくださいました。こうしてみると、罪から離れられず、愚かにしか見えなかったサムソンと、主イエス・キリストが重なるのです。

3) 主がともにおられる

こんなことを言うと、意外に思われる方がいます。しかし彼の生涯をもう一度振り返ってみましょ

う。彼は生まれる前から主の使いによって「神に献げられたナジル人で、イスラエルを救い始める」と言われていました。その誓いは、彼がどんなに乱暴者であろうが、律法を破ろうが、取り消されることはありません。たとえサムソンが弱さを持っていたとしても、主の救いのみこころが成し遂げられていきす。ナジル人の誓いをした以上、どんなことがあっても神の約束が果たされていく。それほど重い約束です。サムソンは特別な役割を与えられていました。

ではサムソンは私たちと全然関係ないのかというとそうではない。彼は信仰者でありながら、罪の弱さはかかえたままでした。そういう点では私たちもサムソンと変わりません。神を信じていても、真っ黒な罪が自分のうちにあると認めざるを得ません。しかし、あのようなサムソンにも主がともにおられるたというのなら、私たちにも主はおられはすです。主がともにいてくださると信じる事ができます。

4) 希望が残されている

と、今言いましたが、ひとつだけ気になることが残っている。「主がサムソンを離れた。」これはどう考えるのか。最後にそのことに触れておきます。主がサムソンから離れたことにより、どうなったのでしょうか。力を失い、両目をえぐられ牢につながれていきました。やはりここでも、サムソンのこととイエス・キリストが重なります。主は十字架におかかりになったとき、なんと叫んだでしょう。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」主が十字架におかかりになったとき、ずっとおられたはずの父なる神はいません。主は弱くなられ、死んでいかれました。十字架にはなんの希望もないように見えました

私たちもあつてほしくないことですが、あるときトラブルに巻き込まれてどこに解決があるのかまったく見えない暗闇を歩まなければならないときがあります。本当に主がともにおられるのか。どこにも希望がない。そうとしか思えないときがあります。私たちはそこで絶望するしかないのでしょうか。

聖書に何と書いていますか。22節。「しかし、サムソンの髪の毛は、剃り落とされてからまた伸び始めた。」主が離れてしまったように見えても、実は希望がきちんと残っている。主は十字架で父なる神に捨てられましたが、三日目に墓の中からよみがえりました。神がひとり子を愛して死から取

り戻してくださったように、私たちもそうなる。
真っ暗闇のように見えても主は私たちとともにお
られ、必ず解決の道に導いてくださいます。この方
とともにまた歩んでまいります。